

人間たちの和解

——日・中・韓、東アジア雅楽史の視点から——

上智大学大学院 文学研究科史学専攻 博士後期課程

C1123900 松浦晶子(まつうらあきこ)

要旨

2012年、尖閣諸島(釣魚島)と竹島(独島)の領有権をめぐる、日本と中国・韓国との関係は悪化した。そして日本のテレビに頻出しているK-POPや韓国ドラマなどの文化事業が非難を浴びることとなり、世間では「韓流排除」か「政治と文化交流は別」かで意見が割れた。私は中国宮廷音楽史を研究する者として、音楽史の視点からこの問題について考察することにした。とくに、〈人間たちの和解〉を目的とし、日・中・韓が共通してもつ「雅楽」を手がかりに、雅楽の効能や外国音楽との関係を紐解いた。中国生まれの雅楽は、異なる身分や民族からなる中国人の心を和解し一つにするために、文化的にも政治的にもきわめて重要なものであった。やがて唐王朝になると、雅楽以上に、胡楽(西域伝来の新しい音楽)や燕楽(饗宴用のアジア一帯の音楽)が人気を博したのだが、胡人の反乱によってそれらの音楽も王朝もともに滅亡してしまう。しかし、後の北宋王朝で雅楽が復活し、朝鮮半島に伝えられた。中国では清王朝崩壊で雅楽は滅んだが、韓国では現在も演奏されている。一方で雅楽を凌駕した胡楽や燕楽は日本に渡って生き延び、やはり今も雅楽として宮内庁に残されている。つまり、日本と韓国の伝統音楽である雅楽は、アジアの音楽を起源にもつ国際色豊かな音楽なのである。私は最近、上智大学の近くで開かれた日韓合同雅楽演奏会で雅楽を聴き、日本に流入する外国の音楽を排除したり、また政治とは別個に考えると、音楽の力を軽視したりしてはいけないと感じた。かつて中国人が雅楽の和解の力を信じ、人間同士の心の壁を乗り越えようとした歴史や、日・中・韓の祖先たちが国際的な音楽を進んで受容した歴史を、私たちは今一度よく知る必要がある。とくに急速にグローバル化する現代社会において、音楽のもつ〈人間たちの和解〉という力を見直すべきであろう。

はじめに

2012年に日本を駆け巡ったニュースの中で、最も衝撃的なものは何であろうか。私にとってそれは、日本政府による尖閣諸島(釣魚島)の国有化であった。尖閣国有化は、中国でかつてないほど大規模な反日デモを引き起こし、日中関係は過去最悪になったと言われ、インターネット上では戦争が始まるという流言が飛び交った。またそれに先立って韓国とも竹島(独島)をめぐる摩擦があったことで、東アジアの情勢は一時緊迫し、現在もなお尾を引いている感が否めない。

そして日本人の怒りの矛先は、日本のテレビに頻出するK-POPや韓国ドラマなどの文化事業に、真っ先に向けられることとなった。ちまたではK-POP歌手を紅白に出場させるなどという批判が上がり、政治家までもが韓国ドラマの多さに苦言を呈するという事態になって、「韓流排除」の動きが加速した。一方で、「政治と文化交流は別個に考えるべきだ」という声も聞かれる。我々日本人は今、台頭する中・韓とどう向き合い、彼らのもたらす文化をどこまで受け入れるのか、いまだ明確な答えを見出せずにいるのである。

私は中国の唐宋時代(618-1279)の宮廷音楽史という、特殊な分野を研究している。だが2012年に起こった東アジアの政治と文化交流の問題は、私の研究と無関係とは言えない。なぜなら、日・中・韓の音楽交流はすでに1000年以上の歴史を持ち、とくに私の研究する唐宋時代に音楽交流は最盛期を迎え、政治的問題に翻弄されたのもこの時代だからである。

そこで私は中国の宮廷音楽史の視点から、この問題について考察したいと思う。その手がかりとして、日・中・韓が共通して持っている、「雅楽」という伝統的な宮廷音楽に注目したい。雅楽を生み出したのは古代中国人であるが、かつて彼らは、雅楽には<人間たちの和解>という効能があると考えていた。だから中国の歴代王朝は、雅楽の制作と演奏に腐心し、人々は雅楽を聴いて心をついにした。そのみならず、外国に広めており、現在もなお日本の宮内庁と、韓国の宗廟(朝鮮王を祀った廟)で聴くことができる。中国では宮廷音楽制度がもう残されていないだけに、それは歴史的価値の高い音楽である。

私は雅楽のもつ<人間たちの和解>という効能について考察しながら、中国雅楽と外国音楽との関係も紐解き、そして日・韓の先人たちが雅楽をどう受容し発展させたのかを明らかにすることで、2012年の政治と文化交流の問題について結論を出したいと思う。

なお、日本国内における中・韓雅楽史は先行研究の積み重ねが少ないうえ、国外でも最近注目されてきた分野であるため、その詳細はいまだ明らかになっていない。それゆえ、この論文で当時の史料を挙げながら1つ1つ確認していくこととする。

1. 雅楽による<人間たちの和解>

東洋哲学の祖、中国の孔子(前551-前479)が、あるみやびな音楽を聴いて、3か月間食事の味を忘れるほど感動したという有名な話がある『論語』述而。そのため、孔子の死後も弟子たちは音楽について議論を重ね、次のような効能を見出した。

音楽を、(祖先を祀った)宗廟の中で、君主と臣下たちが一緒に聴くと、互いに心をやわらげ敬愛の気持ちを強くする。ふるさとの集会場で、年寄りから若者たちまでが一緒に音楽を聴けば、互いに心をやわらげ温順な気持ちを強くする。家庭内で、親子や兄弟たちが一緒に音楽を聴けば、互いに心をやわらげ親愛の情を強くする。『礼記』「楽記」]

とある。そもそも古代中国には、君臣、長幼、親子、兄弟など、現代よりもはるかに重い意味を持つ「身分」というものが、人間のあいだに存在していた。中国の王朝はその身分秩序を「礼」と呼んで人民を指導教化し、社会の統治システムとして活用していたので、少しも乱すことは許されなかった。古来人間は、対等ではなかったのである。

しかし身分秩序だけでは、血の通わない人間関係になることは想像に難くない。そこで注目されたのが音楽であった。そもそも音楽は、人間の感情を音で表現したものだから、人間の心を強く惹きつけ、気持ちをやわらげる効果を持つ。それゆえに、身分の異なる人間たちが一緒に音楽を聴けば、心が穏やかになって互いに和解できたからである。そこで中国人は「楽」を「礼」の対立概念に置いた。すなわち、「礼」によって人間に序列をつけ、「楽」によって和解させるのである。それは「礼楽思想」として体系化され、その思想にかなった美しく善い音楽を「雅楽」と呼んだ。そして人々が一堂に会する時には必ず雅楽を演奏し、和解を試みたのである。

さらに、人間の感情の表れである音楽は、政治にも深く影響を及ぼしていたことが、次の史料から読み取れる。

平和な世の音楽が、安らかで楽しげであるのは、その国の政治が和やかに行われているからである。乱世の世の音楽が、怨みがこもって怒りの感情が表れているのは、その国の政治が人心に逆らっているからである。今にも滅亡しそうな国の音楽が、哀しみに満ち憂えているのは、その国の民が困り苦しんでいるからである。声音や音楽の道は、政治の状況と深く関連しているのである。『礼記』「楽記」]

とある。政治が善ければ世の人の心も平安でその音楽も善くなるが、政治が悪ければ世の人の心は乱れその音楽も悪くなる。音楽は、政治や社会の状況を映す鏡だと言えよう。そうなればおのずと、音楽が悪ければ政治や社会も悪くなるという考えも成り立つ。だから、歴代皇帝や官僚たちは政治会議の場で、音楽について真剣に議論を重ねたわけである。

2. 雅楽の演奏方法

さて、雅楽はどのように演奏されたのか、具体的に見ていきたい。一番肝心なのは楽器である。雅楽の楽器は「八音」と言い、金・石・土・革・糸・木・匏・竹という自然界の八種類の素材を用いて作られ、例えば金なら鐘、石なら磬、土なら埴、革なら鼓、糸なら

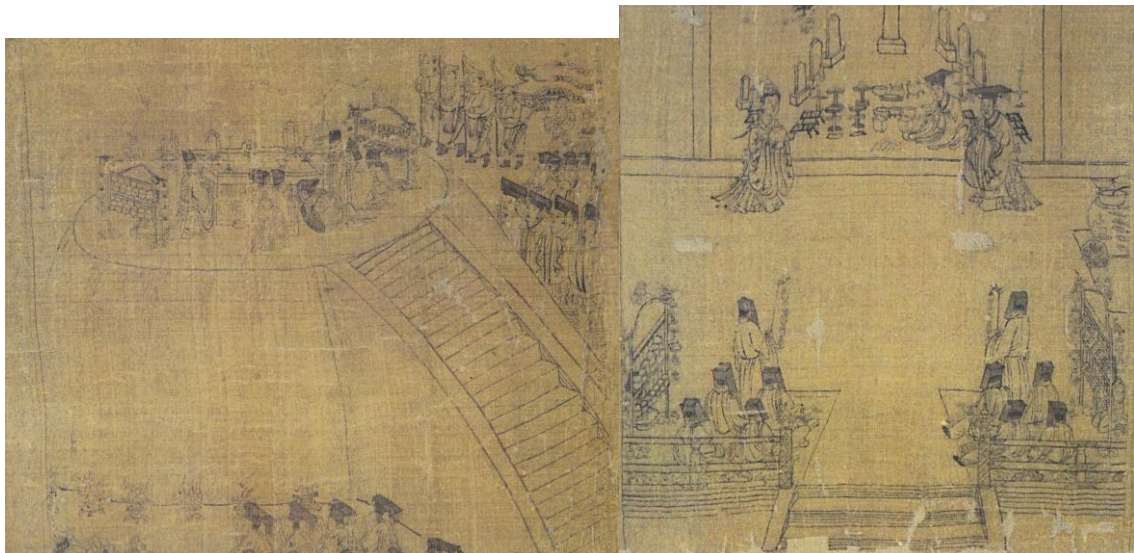
琴、木なら柷、匏なら笙、竹なら笛という具合である。さらにその演奏に合わせて歌手が歌う。つまり、八音の素材と人間の声が合奏することで、自然界と人間社会の調和を試みたのである。和解の対象は、実に人間に限ったものではなく、まさに＜宇宙の和解＞を目指したとも言えよう。

さらに音階も重要であった。中国では音階を宮・商・角・徵・羽(仮に宮をドとすると、ド・レ・ミ・ソ・ラにあたる)と呼んだのだが、その役割は次の史料が示している。

宮は君である。商は臣である。角は民である。徵は事である。羽は物である。五つの音が乱れなければ、音楽はよく調和する。宮が乱れて荒々しくなるのは、その国の君主が驕りたかぶっているからである。商が乱れて平静を欠くのは、その国の臣下が任に耐えられないからである。角が乱れて憂えた感じになるのは、その国の民が悪政を怨んでいるからである。徵が乱れて哀しい感じなのは、労役が多くて民が苦しんでいるからである。羽が乱れて危急な感じなのは、国の財物が乏しくて民が貧困にあえいでいるからである。『礼記』「楽記」]

とある。音階に身分秩序と社会の様子を投影する独特な手法をとっていたわけであるが、これは音楽と政治社会の状況は表裏一体であると考えられるゆえであろう。だから、音階の管理は社会の管理と同じく慎重に行われた。

しかし楽器や音階に厳しく規定があるのは、＜人間たちの和解＞を実現できたとしても、音楽の芸術性を乏しくするという見方もできよう。だが重要なのは、雅楽を用いる場所なのである。



■李公麟「孝経図巻」北宋・元豊8年(1085)頃。メトロポリタン美術館 (注1)

上図は祭祀での雅楽演奏の一場面である。雅楽は、神々や祖先の祭祀、政治会議や外交

など、祭祀や儀式の場で演奏されることが多かった。とくに祭祀では、祖霊や天神を呼んで祭壇にお迎えするのは雅楽の役目であったから、当然やかましい演奏は憚られ、より神聖な雰囲気演出できる楽器や音律が求められたのだろう。

3. 胡楽と燕楽の問題

ここで、中国雅楽と外国音楽との関係を考えていきたい。そもそも多民族国家であった中国は、民族ごとに独自の音楽を持っていたし、交易品や戦利品として、外国音楽もたえず流入してきた。

その中国で外国音楽が最も繁栄したのは、唐王朝(618-907)である。傾国の美女、楊貴妃(719-756)の夫として有名な皇帝玄宗(685-762)の時代は、東西交通が活発であったことがよく知られている。これにより、首都長安は外国人であふれ、ゾクド人の安禄山(705-757)をはじめ西域系の人物が政界に進出してきた。それにともない、西域系の「胡楽」が宮廷を席卷することになる。さらに「燕楽」という饗宴で演奏するジャンルもすでに定着しており、讌楽伎・清楽伎・西涼伎・天竺伎・高麗伎・龜茲伎・安国伎・疏勒伎・高昌伎・康国伎のいわゆる十部伎があり[『通典』巻144「楽四」]、唐の宮廷はアジア一帯の音楽で満たされていたのである。

やがて玄宗は、次々に流入してくる雑多な胡楽を、天宝13年(754)に手を加えて中国化した[『新唐書』巻22「礼楽一二」など]のだが、直後に安禄山が反乱を起こしたことが原因で唐は衰退、その後戦国時代に突入し、雅楽・燕楽・胡楽をはじめ宮廷音楽は無残に破壊された。このことについて、唐の詩人である白居易(772-846)は、

玄宗はみやびな音楽を好んで作曲し、中華と異民族の音楽を混ぜて演奏させることはなかった。天宝13年に、始めてみことのりがあり、(宮廷音楽である中華の)法曲と胡楽の新しい音楽とを合作することになって、有識者がこれは大変だと思っていたら、翌年の冬に、安禄山が謀反を起こしたのである。[白居易『法曲』]

と嘆いた。白居易は、胡楽による宮廷音楽の破壊が、胡人による唐王朝の破壊を導くことになったと言いたいのであろう。後世の人の中には、外国音楽をもてはやした唐の宮廷を恨んだ者が少なからずいたのである。

だがこれは結果論である。唐では外国音楽ばかりが人気を集めたが、それを野放しにせず十部伎という別のジャンルとして整備していたことは無視できない。玄宗も流入し続ける胡楽を自国の音楽文化にうまくなじませた一方、雅楽の楽曲を「十五和の楽」として整備し直し[『通典』巻142「楽二」]、雅楽とそれ以外の音楽とを明確に分類管理していたのである。外国音楽を阻害せず、伝統音楽を軽視せず、両者を王朝みずから整備し分類管理したのは、唐王朝の音楽に対する愛情と尊敬の表れであると、私は感じる。

4. 雅楽の再生

唐の滅亡後、五代十国の興亡する戦国時代を経て、北宋(960-1127)が成立する。北宋では長い戦乱への反省から文治主義につとめ、皇帝や官僚は建国初期から雅楽整備を熱心に行ったのである。

宋王朝の建隆(960-963)の初め、楽器や服飾を修復した。……乾徳年間(963-968)には、秘書監の尹拙が、「(雅楽の音楽隊を)三十六架に増やすべきである。唐王朝では雅楽の人員が多く設けられていたが、今は少なくなっている。その人数を補い、欠けることのないようにさせるべきだ」と建言した。『楽書』巻114「聖朝樂具」

とある。建国初期から北宋王朝は雅楽の楽器や衣装を修復しており、唐王朝の雅楽を復興しようと努力を重ねたようである。そして建隆2年正月の大朝会に、早々に雅楽を演奏したという記事が見える『長編』巻2「建隆二年正月丙申朔条」。この北宋は、中国史上最も雅楽が盛んに演奏された時代であり、唐の模倣にすぎなかったのは最初の3代の皇帝までで、4代目の皇帝仁宗(1010-1063)の頃から、宋風の雅楽が整備されることになる。しかも、官僚から在野の人間までもが参加して、音律の問題から、楽器の種類やデザイン、音楽隊の規模などを熱心に議論しており、唐では見られない動きが史料から読み取れる。

そして北宋末期には、大晟府(たいせいふ)という音楽専門の部署が設置され、雅楽は大晟楽と名付けられて演奏されることになる『宋史』巻129「樂四」。祭祀でその大晟楽を聴いた孟元老(生没年不詳)は、次のような評価を書き残している。

歌う者たちがいて、その声は清く透き通っており、「鄭衛の声」の比ではない。『東京夢華録』巻10「賀詣郊壇行礼」]

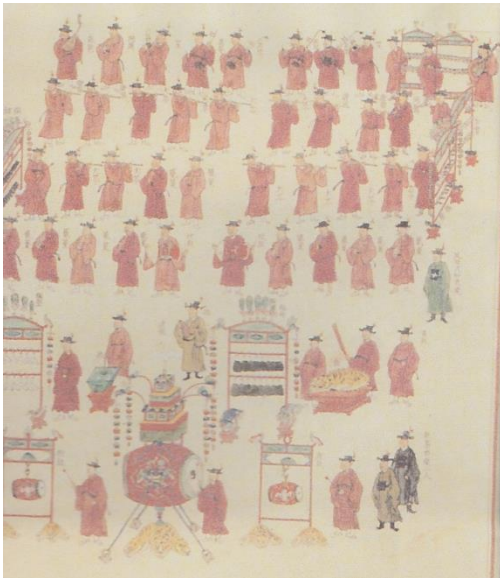
とある。「鄭衛(ていせい)の声」とは、ここでは民間や外国音楽などを指していると思われる。大晟楽はそれらとは比べ物にならない品格を持っていたと分かる。孟元老は他にも、会場に置かれた威厳のある楽器や、大晟楽に合わせて粛々と儀式を進行する様子を詳細にレポートしており、大晟楽の演奏が神聖な雰囲気を作り出すのに大きな役割を果たしていたことが読み取れる。この北宋の雅楽こそが、清王朝(1636-1912)崩壊まで続く宮廷音楽制度の基礎として引き継がれていくのである。

5. 日・韓の雅楽の受容

以上のような中国雅楽を、日本と韓国がどのように受け入れたのかを、先行研究を参考にしながら見ていきたい。

まず、韓国雅楽を見てみよう。現在韓国にある雅楽、すなわち宗廟祭礼楽は、その原型

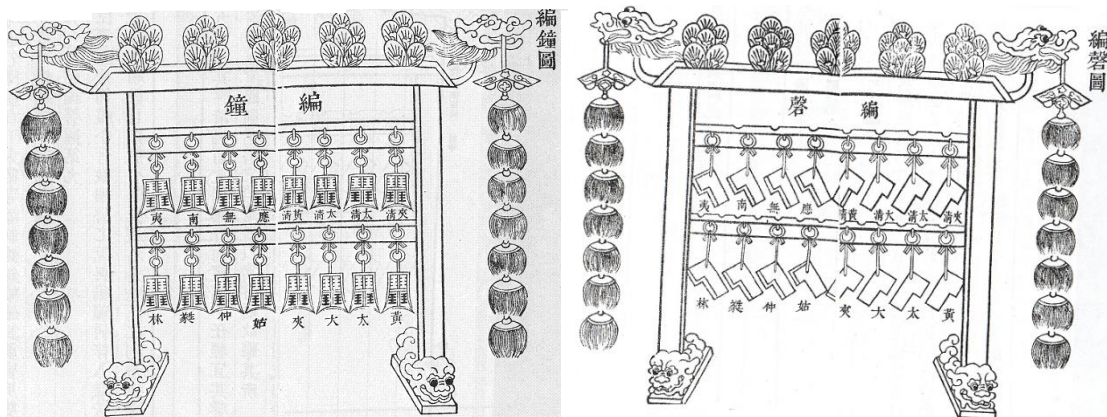
を北宋で復活した雅楽にもつと言える。



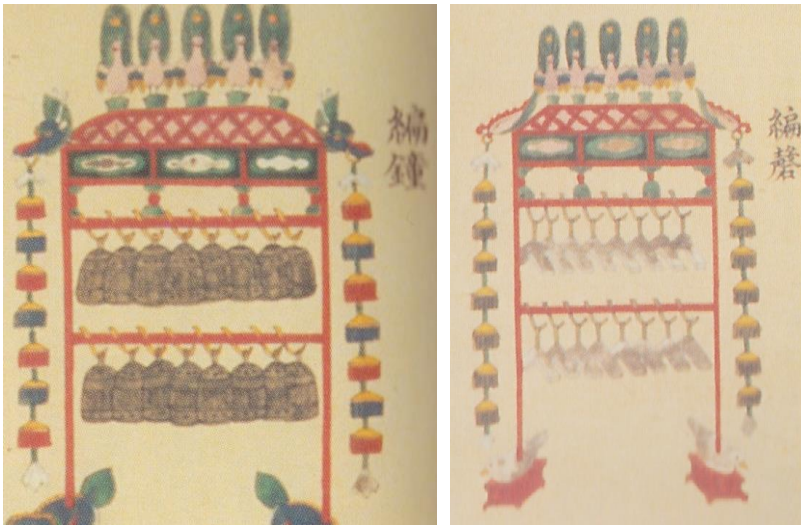
■軒架図「己巳進表裏進饌儀軌」(1809年) (注2)

楊蔭瀏氏の先行研究によれば、北宋の熙寧年間(1068-1077)に北宋の宮廷が音楽家を高麗(918-1392)に派遣して雅楽を伝え、これ以後、高麗から宋に使者が来るたびに教えてやり、宣和6年(1124)には高麗に出向していた官が宋に戻ると、「高麗の音楽と舞踏は盛大で、とても美しい」と称賛したのだという(注3)。

そこで試みに北宋王朝の楽器と見比べてみると、実に正確に保存していたことが見て取れる。例えば、雅楽で最も地位の高い金属製と石製の「編鐘」と「編磬」という楽器がある。それが下の図で、上段が中国、下段が韓国のものである。



■北宋、皇祐年間(1049-1054)の編鐘・編磬 [『皇祐新楽図記』編鐘・編磬図]



■楽器図「己巳進表裏進饌儀軌」(注4)

編鐘と編磬は、古代からある楽器であり、とくに編鐘は、紀元前5世紀頃の曾侯乙墓の副葬品として出土したことで有名な楽器である。注目すべきは、かかっている鐘と磬の数である。鐘や磬の数は時代や用途によってまちまちであるが、上の図では両方とも上下8枚ずつの計16枚になっており、これは北宋で12枚にするか16枚にするかの論争の末に『宋会要』樂一、六～一五など、16枚に定着したことと無関係ではないだろう。韓国雅楽は、北宋で復活した雅楽をよく保存していると言えよう。

それに対して日本雅楽は大きく趣を異にする。荻美津夫氏によると、そもそも日本と、中国・韓国との音楽交流の歴史は古く、日本にはすでに5世紀から、朝鮮系の新羅楽、百濟楽、高麗楽が渡来人によってもたらされたが、やがて遣隋使や遣唐使が中国の先進文化を将来し、8世紀には唐で流行していた胡楽や燕楽を持ち帰り、それらを雅楽として受け入れたのだという(注5)。だから日本雅楽は、琵琶や箏など中国以外に起源をもつ楽器もよく使われ、アジア一帯の音楽をレパートリーとするのである。



■唐經由で日本にもたらされた天竺(インド)楽「蘇合香」(注6)

それゆえに、中国雅楽との類似点はきわめて少なく、中国雅楽で最も重要な編鐘・編磬なども日本雅楽ではあまり用いられない。だから日本雅楽は正確には雅楽ではないのだが、中国ではすでに胡楽や燕楽が減ってしまったことを思えば、日本雅楽の歴史的な重要性は変わらず、まさに「新雅楽」とも言うべき音楽である。

このように中国音楽は日本と韓国に渡り、韓国は雅楽を、日本は胡楽や燕楽の方を受容し、違った内容をもつ雅楽として今に至るまで発展し続けている。渡辺信一郎氏は日本の使節が格式の高い雅楽でなく、胡楽や燕楽を受容した理由について諸説を挙げている（注7）が、決め手はないように思える。いずれにせよ、＜人間たちの和解＞という効果を持つ雅楽は、日本と韓国に受け継がれて独自の発展をし、現代では韓国の宗廟で、日本の宮内庁の舞台上で、その国際色豊かな演奏でもって訪れた人々を楽しませているのである。

おわりに

以上のように、＜人間たちの和解＞を目的とした中国生まれの雅楽は、唐で胡楽と燕楽に人気を奪われたものの、北宋になって見事に復活して人々の心をつかんだ。中国では清王朝崩壊と共に滅んだが、それは韓国に渡って引き継がれることとなった。一方で雅楽を凌駕した胡楽と燕楽は、日本に渡って新しい形の雅楽として今なお進化を続けている。

私は2012年7月、上智大学そばにある紀尾井ホールで「紀尾井、江戸、邦楽の風景——朝鮮通信使——」という日韓合同雅楽演奏会を観覧してきた。教会の鐘が鳴り響く四ツ谷で、日本と韓国の伝統音楽を聴くというのはとても新鮮な体験であった。はじめに韓国の雅楽、次に日本の雅楽を披露した後、最後に韓国の雅楽の音色に合わせて日本雅楽の舞が披露されると、会場は拍手時喝采であった。まさしく、日本人と韓国人との心が一つになった、＜人間たちの和解＞の瞬間であったと思う。ただ一つ気がかりな点があった。韓国の演奏者はみな若者だったのに対し、日本の演奏者はみな年配者だったことである。観客も若者は少なかった。

思えば、日本の若者は雅楽についてどこまで知っているのだろうか。日本の伝統音楽の雅楽が、実は中国経由で入って来た国際的な音楽であることを、そして韓国にも雅楽があって、やはり中国起源であることを知っているのだろうか。アジアの音楽が長い間交流を続けてきた歴史を知っていれば、「韓国の流行音楽を日本から排除しよう」などという意見は出てこないはずである。同時に、中国人が雅楽による＜人間たちの和解＞を信じて政治を行い、社会を治めようとしたことをふまえると、「政治と文化交流を別に考える」というのも、あまりに音楽の力を軽んじた意見に思える。

大切なのは、なぜ音楽を演奏し、聴くのかということ、音楽文化を支える私たち若い世代がしっかり考えることである。音楽はただ娯楽のためだけにあるのだろうか。いや、そうではない。＜人間たちの和解＞こそが核心にあるのだと思う。音楽は頭ではなく、心で演奏し、聴くものである。かつて多民族・多身分の国家に生きる中国人が、その心の

すれ違いを、音楽を用いて克服しようとした歴史を忘れてはならない。そのような心を受けて、日本人と韓国人が 1000 年以上も国際的な雅楽を守り続けてきたことも忘れてはならない。私たちは今、急速に進むグローバル化社会に身を置いている。世界中の<人間たちの和解>に、音楽は欠かせないものなのである。

注

- (1) 小川裕充・弓場紀知編『世界美術大全集、東洋編——五代・北宋・遼・西夏——』(5 巻、小学館、1998 年)より図を引用。
- (2) 이재숙 외 『조선조 궁중의례와 음악』(서울대학교출판부、1998 年)より図を引用。
- (3) 楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』(上冊、人民音楽出版社、1981 年)を参照。
- (4) 注(2)の前掲書より図を引用。
- (5) 荻美津夫『古代音楽の世界』(高志書院、2005 年)を参照。
- (6) 河鱈實英『舞楽図説』(改訂増補故實叢書、明治図書出版、1993 年)より図を引用。
- (7) 渡辺信一郎「雅楽の来た道——遣唐使と音楽——」(『専修大学社会知性開発研究センター東アジア世界史研究センター年報』2、2009 年、5～20 ページ)を参照。